



|                  |                                                                                       |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 〈小人書林迷走録〉第3回 〈Re—婚活〉を阻止せんとする悪玉たち : 新婚姻法連環画に迷いたい！                                      |
| Author(s)        | 武田, 雅哉                                                                                |
| Citation         | 連環画研究, 2, 37-46                                                                       |
| Issue Date       | 2013-03-10                                                                            |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/2115.98390">https://doi.org/10.14943/2115.98390</a> |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/98390">https://hdl.handle.net/2115/98390</a>     |
| Type             | departmental bulletin paper                                                           |
| File Information | renkanga_2_37-46.pdf                                                                  |



〈小人書林迷走録〉第3回

## 〈Re-婚活〉を阻止せんとする悪玉たち ——新婚姻法連環画に迷いたい！

武田 雅哉

目的もなく連環画をコレクションし、ある程度の数にもなると、決して名作や經典作品のみに注目しない、連環画の流れがぼんやりと見えてくる。今回は田村容子さんが『連環画報』の新婚姻法ものを題材にして、婚姻法連環画の流れを俯瞰してくれているので、こちらは新婚姻法関連の連環画単行本の世界に、ちょっとばかり迷い込んでみることにした。

### 新婚姻法関係の刷り物

新婚姻法は、1950年5月1日に公布施行された。全8章27条から構成されている。自由結婚、一夫一婦制、男女平等、離婚の自由などが謳われている。

しかしながら、このような新法は、旧来の世界から容易に受け入れられるものでなかったこと、言うを俟たない。そこで、新法と新思想を広めるべく、宣伝活動が必要となる。その際に使われたものが、ポスターや連環画であった。

『全国総書目（1951～1954年）』によって、それらの出版の傾向を把握しておこう。

この時期には、婚姻法をテーマとしたポスターが32点出版されている。雷世民「結婚登記」（人民美術出版社、1950年12月）は、婚姻法施行に先立つもので、新しい形態の結婚を奨励したものだが、68万部刷られている。

「掛図」と呼ばれる、図解様式のポスターでは、「中華人民共和国婚姻法図解」（人民美術出版社、1952年4月）や「婚姻法図解」（上海人民美術出版社、1952年12月）があり、特に前者は56万8千部印刷されている。

「連環画掛図」は、連環画型式を用いた図解で、この時期の『全国総書目』では「掛図」とは別に項目をたてて分類されているが、ここにも「生産戦線上の一对新夫婦」（徐光玉編、劉継貞絵。人民美術出版社、1953年4月）、「婚姻法成全了兩对好夫婦」（賀友直、凌杏邨作。上海人民美術出版社、1953年1月）などのほか、「童養媳翻身当村長」（翁逸之、姚有信作。上海人民美術出版社、1953年1月）、「寡婦結婚生活美

満」(張楽平、俞雲階作。上海人民美術出版社、1953年1月)のような、<sup>トンヤンシー</sup>「董養媳」や「寡婦」といった特殊な立場にある女性をテーマにしたものもある。

「連環画」の項目を見てみると、「婚姻自由」というテーマのくくりが設けられ、75種の作品がリストされている。1955年の『全国総書目』になると、23種があげられている。

婚姻法や新しい結婚の諸相を扱った連環画は、大きくふたつに分類される。ひとつは婚姻法普及のためのマニュアル本。いまひとつは、婚姻問題を扱った物語である。

### 『婚姻法図解通俗本』の鬼婆たち

まず前者を見てみよう。架蔵のものは、『婚姻法図解通俗本』(以降『通俗本』とする)と題されたもので、1951年11月初版、華東人民出版社編写、中華全国美術工作者協会上海分会絵図。華東人民出版社が編輯兼出版。初版で1千万部刷られている。値段は人民幣1500元。この本が完成するまでの経緯については、1953年2月1日の『人民日報』に、「《婚姻法図解通俗本》的編写經驗」という文が載っているの、ご関心の向きは参照されたい。

表紙は毛沢東の肖像を背景に、「婚姻自由」の旗を持つ新婚さんと、ふたりの結婚を祝福する親戚友人たちといったところである(右-表紙)。

表紙の裏には、「中国人民政府協商会議共同綱領第六條」が掲げられている。すなわち「中華人民共和國は婦女を束縛する封建制度を廢除する。婦女は政治、經濟、文化教育、社会の生活の各方面において、均しく男子と平等の權利を有する。男女婚姻の自由を實行する」と。



その「前言」においては、婚姻法の意義を述べ、婚姻法が実行されてからの一年で、一定の好ましい成果があったことを言う。それとともに、結婚の自由を求めたために虐殺された女性が少なからずいたことも報告する。中南区では女性の虐殺と自殺が一万人を越えたこと。華東区においては、山東省だけで、10か月のあいだに、1245人の女性が死に追いやられたことを言い、婚姻制度の変革には激しい抵抗があることを訴える。それゆえ、婚姻法の宣伝と学習活動は、広く、また深く展開されなければなら

ない。そのためにこの連環画が作られたのだという。

『通俗本』は、婚姻法の全 27 条にわたり、文章と絵解きとで解説を進める。

このような宣伝連環画によく用いられるのは、新旧の対比という方法である。旧社会における悲惨なありさまと、新中国における明るい様子、あるいは旧思想の人間と新思想の人間とを、対比的に描く。もちろん前者は悪で後者が善である。ぼくらもそのあたりに注目しながら、眺めてみよう。

この種の連環画では、旧思想の持ち主たちが、悪役、もしくは思想未開の人物として描かれるが、『通俗本』では、夫が童養媳の髪を引っつかみ、陰険そうな相手の両親が嫁をいじめる様子が描かれている。両親のうちでも特に憎々しく描かれるのは、母親のほうである。この絵でも母親は鬼のごとく描かれている〔下-第 12 頁、同拡大図〕。



これらを見るにつけ、連環画の世界でもっとも生き生きと描かれるのは、かれら悪役たちであるとの確信は、さらに揺るぎないものとなる。ここでは、婚姻法に関しては基本的に汚れ役を仰せつかった、旧社会の鬼畜のごとき「お義母<sup>かあ</sup>さま」たちの絵姿をご鑑賞いただく〔下-第 24 頁、同拡大図〕。



そんな鬼婆たちに虐げられた嫁たちも、新婚姻法のもと、望んでなかったわけではない婚姻関係を解消して、晴れて新しい結婚を成し遂げると、もちろん最後は、この  
デウス・エクス・マキナ  
 〈機械仕掛けの神さま〉の登場！  
 これで決まりです（右・第 103 頁）。

たいていの婚姻法ものの連環画は、この巨大な毛主席で締めとなる。もちろんその前に、幸福な結婚をした主人公たちの明るい顔が描かれるのだが、鬼婆に比べたら、べつにおもしろくもなんともないので、ここで鑑賞するまでもないだろう。

そんなわけで、悪役たちの肖像を中心に、いくつかの作品を見ていこうではないか。

## がんばれ、童養媳！

『童養媳翻身』（華東婦聯宣伝部／編文、蔡振華／絵図。新美術出版社、1953 年 2 月）は、タイトルのとおり、旧社会で、童養媳として婚約を強いられた娘が、新婚姻法のもとで、これを解消し、新たな結婚に踏み切るという物語である。

江蘇省の某村に住む劉翠華は、8 歳の年に、林大娘の家に童養媳として入る。それからというもの、冷飯残飯にボロボロの衣服をあてがわれ、牛馬にも劣る生活を強いられるのだった。ことば遣いが激しく、頑固で強情——ディエツイ〈鉄嘴〉の異名を持つ極悪非道な義母の林大娘、そしてそのグータラ息子、すなわち彼女の未婚の夫から、日々、執拗な虐めを受けるのであった（下左・第 10 図、下右・第 8 図）。

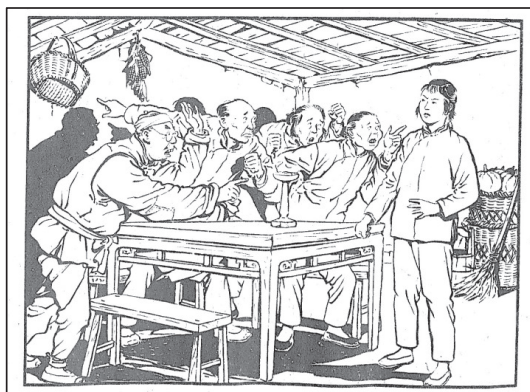


そうこうするうちに、村が解放された。共産党の幹部たちのはなしを聞くうちに、翠華は成長していく。いっぽう未婚の夫はといえば、ろくに生産にも従事せず、進歩のない男のまま。村人は彼を「二流子（ごろつき）」と呼んだ。夫はいまや、翠華の人生の重荷でしかなかった。

村民会では、工作隊が「婚姻法宣伝大会」をおこなった。その場面を



描いたコマには、「婚姻法図解」という掛け物が広げられている〔上-第 25 図〕。1952 年に同名の「掛図」が刊行されていたこと、さきほど確認したとおりである。



これによって覚醒した翠華は、林大娘のもとに行き、婚約の解消を訴えた。親戚やご近所さんなど、数多の「封建的思想の老人たち」の猛攻撃を受けるが、翠華は、「あたしのことはあたしが決める！」と言い放ち、かれらを突っぱねるのであった（左-第 30 図、ディエツイ下-同拡大図）。

翠華はついに〈鉄嘴〉の鉄のへらず口をはねのけ、婚約を解消した。それだけではない。彼女がこれだけ奮闘した裏には、青年団員の林傑との新しい恋が始まったことがあった。最後にふたりは、新しい婚姻法のもとで結婚して、めでたしめでたし。



《鉄嘴》林大娘は、一貫して醜悪な顔に描かれている。またその息子、すなわち翠華の婚約者は、髪もばさばさの、情けない悪相に描かれる。

互いに好き合った男女が結婚してハッピーエンド！ というのなら、陳腐ながらもありふれたはなしだが、この時代は、ハッピーエンドに至る段階が複雑であり、まずは旧社会のもと、不本意ながら婚約してしまった人びとが、まずは婚姻法によってこれを解消し、しかるのちに新たな結婚を獲得する、というパターンが多い。したがって、離婚に至る過程、すなわち〈離婚活〉が主要な描きどころとなる。

### すてきな<sup>かあ</sup>義母さま

ところで、旧社会のお義母<sup>かあ</sup>さまのすべてがすべて、悪党に決まっていると確信していただいては困るのである。

『美満夫妻』（徐良士/編文。汪玉山、徐正平、徐宏達/絵画。新美術出版社、1953年2月第1版。いま上海人民美術出版社、2006年1月の復刻版による）を見てみよう〔下・表紙〕。まずはその「内容提要」を読んでみる。

解放前、封建的な觀念の父母によって、劉淑賢は結婚を決められた。しかし淑賢は、親が決めた結婚には不満であった。解放後、新婚姻法の宣伝と支持は、向上をめざす淑賢に婚約解消の機会を与えるとともに、志を同じくする趙光発とのあいだに恋愛感情を芽生えさせた。ふたりは任務を遂行し終えるために、婚期を遅らせ、切磋琢磨するのだった。趙光発は仕事への積極性が認められ、模範労働者の称号を得た。劉淑賢も故郷でさまざまな任務を完遂するのだった。



河南省魯山の貧しい家に生まれた劉淑賢は、幼いころから男たちとともに力仕事をして生きてきたので、たいへん強い精神力を持っていた。仕事ができるというので、とりもち婆さんが結婚話を持ってくると、罵倒して追い返すのだった。

解放まじかい魯山で、淑賢の母親は、こんなうわさを聞いた。——「共産党の天下になったら、娘たちも共有財産になるらしい」——慌てた母は、すぐさま娘を嫁がせ

ようと画策し、父親が淑賢を遠い村に連れて行ったすきに、娘を尹家のバカ息子のところに嫁にやる話をまとめてしまう。

母親がうわさ話を夫に伝えている絵がある。吹き出しの中で煙草をくゆらせている、うさん臭そうな顔の男は、共産党の恐ろしさを宣伝してまわっている国民党の工作員であろう（右-第4図、同拡大図）。



なにも知らされていない淑賢は、まわりの悪ガキどもから、からかわれる。「バカ息子の嫁っこや〜い！」——淑賢は、自分の結婚が強引に決められたことを知って、ショックを受ける。さらにその相手が、まったく勉強もできず、一日じゅう野原を走り回っている知恵遅れの男子であることを知る。作品中、彼は〈<sup>ライハイ</sup>癩孩〉と呼ばれているが、その顔は瘡だらけで、いつも鼻水を垂らし、ことばもまともに話せない、そんな少年であることを知り、ショックは倍増した。



魯山が解放されると、彼女は、解放軍には多くの女兵がいることを知り、入隊しようとするが、まだ幼いことを理由に断られる。やがて淑賢は共青团に入り、団の教育のもと、精神的にも日に日に成長していく。

18歳になった淑賢は、よく学び、ますます進歩を遂げ、団の支部は、彼女を青婦委員とした。淑賢の仕事はますます忙しくなり、結婚のことなど考える余裕もなくなった。たまに思い出すと、結婚に対する考え方も以前とは変わっているのに気がついた。彼女は、婚約者が、すべての面で進歩してくれることを望んでいたのである。

しかし、その期待を裏切って、婚約者は1ミリも進歩しなかった。14歳になっても背が低く、知能が遅れていた。もう4年間学校に通っていたが、まだ1年生のクラスであった。淑賢は、会議に出ていくときに、いつも尹家の前を通ったが、そのたびに、外で遊びほうけている婚約者の姿を目にした。淑賢はため息ばかりが出た。——「ああ、もはや少しの希望もないのだわ……」

旧時代の病巣は切除され……

婚約者の母親は、鬼のようなお義母さまたちとは、ひと味違っていた。淑賢を見るにつけ、嘆息するのだった。——「自分の息子と淑賢とは、差がありすぎる……」と。

1950年5月、新婚姻法が公布されると、宣伝員が村に来て宣伝活動を進めた。淑賢と婚約者の母親も、これを熱心に聞いて学んだ。女たちの中には、宣伝員の話聞いて、みずからの不幸を嘆き、泣き出す者もいた。淑賢は、新婚姻法の理念をよく理解して、婚約者との婚約解消を決意した。自分の父母にも納得してもらい、尹家からの結納品を持って、みずから返却しに行ったのである。相手の母も、婚姻法をよく理解し、みずからが蒙った旧社会での苦痛を思い、淑賢の申し出を、二つ返事で了承した。母親は契約書を返し、心からその婚約解消を望んでくれたのだった。

その場面では、むこうの母親が童養媳の契約書を箱から取り出し、淑賢に手渡す場面が描かれているが、右端にいて、壺やら腰掛けやらを積んで遊んでいる、頭髪の黒くない少年が、知恵遅れの婚約者である〔右-第25図〕。

このあと、彼女は新しい恋人をみつけ、やがてこれと結婚するという、お定まりのハッピーなコースをたどる。明るいに決まっている新中国にふさわしい、一対の健康的な夫婦を作るために排除させられた〈<sup>ライハイ</sup>癩孩〉がどうなったのか。それについては、いっさい触れられていない。



DV 夫から童養媳を救え！

『橘林喜事』(呂英/原著。良士/改編。鄭家声、顔梅華、金寓文、姚有多、任伯宏/絵画。上海人民美術出版社、1953年2月第1版。いま、同社2006年1月の復刻版による)もまた、童養媳が新婚姻法によって、強制された結婚を解消させるはなしであるが、主人公はむしろ、彼女の離婚を助ける、ご近所の未婚のカップルである〔右-表紙〕。

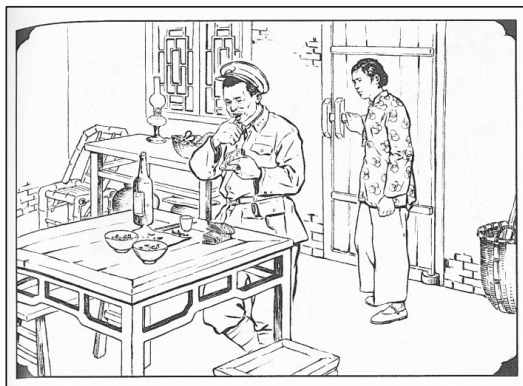


清水郷では、婚姻法教育がなかなか徹底しない。童養媳として、ごろつきの胡発と結婚させられ、いつも暴力をふるわれている亜蓮は、郷長の何鎖福に訴え、離婚を要求しているのだが、「たかが夫婦喧嘩、よくあることだよ」と取り合ってくれず、亜蓮は、いつも泣き寝入り。

清水郷の婦女会主席の韓長秀と民兵隊長の周瑞生は、結婚の約束をしている二人であったが、亜蓮の苦境を見かねて、郷長を説得し、亜蓮の離婚手続きを進めてあげる。

この物語の最後では、長秀と瑞生の結婚証明書を囲んで、村人たちが楽しく談笑するとともに、亜蓮の離婚証明書をも囲んで、みんなが「おめでとう！」と祝賀する。

この作品では、ことなかれ主義の郷長は、最後に改心をするが、絶対的悪役はDV夫の胡発である。回想シーン（各コマを雲形で囲むことで表現している）では、国民党時代には、胡発は正業に就かず、警官となって人びとから金品を巻き上げ、飲む打つ買うに明け暮れていたことが物語られる（右上-第37図、同拡大図）。



### 敵は近くにもいる

これまで見てきたのは、いずれも 1953 年という、新婚姻法公布からほどなくして刊行された連環画である。さらに時間を経た、1957 年の作品として、『親事』（桂本/改編。黄鶴、周樑/絵図。天津美術出版社、1957 年 2 月）を見てみよう（右-表紙）。これは「合作社」時代の産物である（田村氏の論考を参照されたい）。

玉珍ちゃんは、二姨（二番目のおば）と



母とが結託し、やたら縁談話を持ってくるのに悩まされている。嫌気がさして、いつも三姨（三番目のおば）の家に逃げ込むのだった。三姨は農業社に参加していたが、玉珍もおばと一緒に農作業に通う毎日。やがて彼女は、生産小組長の青年、茂順と恋におち、ふたりは結婚を誓い合う。

二姨と母は、玉珍の同意もないまま、ある土地持ちとの縁談を進めてしまう。頭にきた玉珍は、二姨を叱責し、母を説得して、みずから結納品を返却し、縁談を解消してしまう。そうして、茂順との結婚をも勝ち取る。

彼女を応援するのは、すでに新婚姻法の理念をわが物とした、新時代の女性たちだ。ここでは、いわゆる〈媒婆<sup>メイボ</sup>〉（仲人婆さん）役の二姨が、一番の悪役である。彼女が縁談を持ち込んでくるのは、姪のためを思ってというよりは、どうやらみずからも土地持ちとの縁談をまとめることで、ふところがあたたまるとのことらしい。ふてぶてしい面がまえで煙草を吸う、その悪相を鑑賞されたい〔上-第 65 図〕。



## 歌って覚えよう、婚姻法！

新婚姻法を歌にして覚えようという、『婚姻法唱本』（高歌写詞、蔡英插画、蘇南人民出版社、1951 年 11 月）といったようなものも刊行されていた〔下-表紙・22 頁〕。いわゆる連環画ではないが、

ページの下部に歌が、上部に絵図が配置されている。

楽しそうに歩く、表紙の新婚カップル。男は「結婚登記証」を手になっている。

そして、なかを開くと、あッ！ またしても、あのおかたが……。

